

鐸木昌之著 『北朝鮮 首領制の形成と変容 金日成、金正日から金正恩へ』

明石書店, 2014 年

日本における北朝鮮政治体制研究の古典的名著と言ってもよい鐸木昌之著の『北朝鮮——社会主義と伝統の共鳴』（東京大学出版会、1992 年）の増補改訂版が、このたび明石書店から刊行された。92 年版は評者（1974 年生）と同世代の北朝鮮研究を目指した学徒にとっては、必ず手にしたことがある「教科書」的存在の研究書だったはずだ。本書の「序章」から「終章」では、北朝鮮で金日成が首領として君臨する独裁的な政治システムがいかにして形成されてきたのか、歴史的な背景と国際的環境をも交えて説明し、また金正日という首領の後継者がイデオロギー解釈権と自己の権力継承正統化のために金日成主義を創始していく過程を、北朝鮮の一次資料を用いながら丹念に解き明かしている。また、思想教化とも呼ばれる北朝鮮の国内向け政治宣伝に注目して、その企図と効果について、これを歴史的かつ社会的意識を利用した首領への忠誠を信条体系として確立するものだと説明する。一方「補章」では、北朝鮮の統治システムを支える首領制という構造が、政権統治の安定性を担保すると同時に、社会と組織の硬直化を招き、自縄自縛の状態に陥っていく実態も明らかにする。また、1990 年代の食糧危機と飢饉により北朝鮮社会の基層が揺らぎ、そのシステムが変容してきていることにも言及されている。

今回の増補改訂版の発行に当たって著者自身が「はじめに」で、「序章」から「終章」についてほとんど手を加えていないと予め述べているように、92 年版部分の記述内容については大きな異同はない。基本的内容について、20 年以上の歳月を経て今なおその価値を減衰させていないということは、それだけ 92 年版の完成度が高かった証左

でもあろう。すでに 92 年版については刊行以来、いくつか詳しい書評も出ているので、本書評では新たに加筆された「補章」を中心に紹介していきたいと思う。

本書の内容

はじめに

序 章

第一章 体制の起源と革命の課題

第二章 首領制の権力構造

第三章 金正日指導体制の形成

第四章 首領制の「国体論」

第五章 体制神話一星・太陽・白頭山・血脈・地脈・精気

第六章 選択的「開放」と部分的「改革」

終 章 首領制の構造と論理

補 章 金正日と金正恩

1 先軍イデオロギー

2 先軍政治の実態—党組織による軍の統制と国防委員会

3 北朝鮮社会の変容—首領制の社会的基盤の溶解

4 金正恩の登場と金正日の死—金日成への回帰

おわりに

※第一章から終章までは 1992 年版と構成に違いはないので小節紹介は省略

まず始めに本書の全体的な特色を挙げるとすると、徹底して北朝鮮の原資料に依拠し記述されているという点が指摘できよう。すなわち、北朝鮮の言説をもって、その体制の本質に迫るというアプローチ方法である。第五章では歴史学的なテキストクリティークにより、時期による北朝鮮の主張の変遷が明らかにされ、著者の資料に対する読

み込みの深さが窺い知れる。このような文献研究に根差した研究手法について著者は「序章」で、それまでの日本における現代朝鮮政治研究の問題点として、「多くの文献が日本語に翻訳されるために、朝鮮語原資料で裏付けがとられない場合が多い」（10 ページ）と批判している。著者のこだわりを示す一例が「第三章 金正日指導体制の形成」の注 6 である。『人民の指導者』という文献を引用するにあたって、朝鮮労働党出版社発行の原本と雄山閣出版社発行の日本語訳を対照して、日本語版では削除されている箇所があることを発見している（330 ページ）。時として事実改竄も多い北朝鮮の文献を眼光紙背に徹して読み解き、読者に片時も隙を与えないまでに細かく付された注記は様々な引用文献もあって、巻末のフットノートを眺めているだけでも楽しく、著者の書架には一体どれだけ貴重な資料が並んでいるのだろうかと思いをめぐらしつつ、評者はかつて一学徒の身として大いなる刺激を受けたものである。

1992 年当時は、一般の韓国人にとって特殊資料とされた北朝鮮の原資料を手にするのは、たとえ研究目的であっても簡単ではなかった。そのため北朝鮮本国を除けば、北朝鮮研究を行う環境として日本は文献量などから見て世界有数の好条件にあり、その結実が正に本書であった。

だが、今回の増補改訂版にあたって新たに書き加えられた「補章」の記述については、「序章」から「終章」までの北朝鮮の原資料を解読していく手法から大きく変化している。この点は著者が 4 ページの「はじめに」の中で、「それまでの章とは違い、公式資料とともに、北朝鮮から出てきた内部文書、人々のインタビュー証言、そして論文と研究書も使って分析している」とし、北朝鮮に家族を残して来た人に対する配慮として、「インタビュー証言に関しては注を付けていない」と断っている。たとえば 277 ページから 280 ページの党組織指導部に関する説明の中で、第一副部長と副部長が 50 名程度いるという構成や、軍事担当と本部党担当の第一副部長が特に重責にあること、課長が中將の軍事称号を有しており、有事には軍事政策形成と命令に関与できること、また同部 13 課が軍総政治局を担当しているためこれを

指示統制することにより軍全体を党的指導下に置くことができることなどを記述した箇所。そして、283 ページから 286 ページにかけて、本来有名無実であった国防委員会が 1999 年から人民武力部内で毎月会議を開催することになり、内閣に代わって国家の主要な経済権限をも掌握し、北朝鮮の全ての権力機関幹部に対しても処罰権を行使したこと。ただし国防委員会には庁舎もなく、実際に人事案件の処理では幹部調査を行って情報を握っていたのは党組織指導部だったとして、同部が行う報告を基に金正日が国防委員会委員長名義で決定を下す金正日を中心とした会議体であったとする、先軍政治体制における党の位置づけと国防委員会の本質を明快に指摘した記述箇所などは、脱北者の博士論文が参考文献に挙げられているだけである。北朝鮮の資料は一切注記されておらず、詳しい情報源なども注だけでは分からない。

軍の上に置かれた特殊部隊の党作戦部とその部長であった呉克烈について説明した 280 ページから 282 ページについても、注記しなかったという脱北者情報に基づく記述なのか全く注がない。著者は、先軍政治の中核は人民軍ではなく、特殊部隊と核兵器だと指摘（280 ページ）しており、この部分の説明は重要であるので、もう少し根拠がはっきりとした記述がされていてもよい部分であろう。

利用されている文献についても、306 ページから 309 ページで引用分析している「党の唯一的領導体系確立の 10 大原則」は、書誌情報や引用元が明記されていない。これは内部資料であるが、すでに国外に流出し韓国メディアが一部を報じているものの、評者はその全文は未見である。入手経緯など明らかにできない事情があったのかもしれないが、どこでも閲覧確認のできる一般的な資料ではないので何らかの注記が欲しかったところである。一方、同じく内部資料であった 1974 年の「党の唯一思想体系確立の 10 大原則」については、1992 年当時は入手が難しかった金正日の著作選集である『主体革命偉業の完成のために』第 3 巻（朝鮮労働党出版社、1987 年）を著者は出典として挙げて分析している（116 ページから 117 ページ）。

すなわち、今回の増補改訂版で1992年版のような文献解読的手法による北朝鮮体制分析を期待すると、ある意味裏切られる。これについては著者が指摘するように、90年代になってから脱北者が急増して、「かれらは、多くの証言をしたり、あるいは回想録を書くとともに、韓国に定着するにしたがって、北朝鮮に関する論文や研究書を書き続けている。その研究の量も膨大であるだけでなく、水準も非常に高い」(3ページから4ページ)ことを、「補章」の記述をもって示したということなのだろう。

それでは以下、新たに書き下ろされた「補章 金正日と金正恩」の内容について見ていきたい。

「1 先軍政治イデオロギー」において、金日成が死亡して金正日が正式に国家統治者となる時期について描いている。眼を引くのは、金日成死後に金正日が徹底した孤独感にさいなまれた(265ページ)という指摘である。同盟国である中国はもっとも信用できず、頼れるのは軍隊だけ。そのような境地が先軍政治路線へとつながり、また自分に刃を向けない党の軍隊であり続けるためには、総政治局という軍内党組織の維持強化は譲れないものであった(270ページ)とする。そして金正日の孤独感は、北朝鮮の孤立にも投影されたと指摘する(275ページ)。

「2 先軍政治の実態——党組織による軍の統制と国防委員会」では、既述したように脱北者の論文などを利用して、党組織指導部の役割や国防委員会の実態について具体的な説明がなされている。ここでは国防委員会について、戦時状態における軍事動員体制を維持するための特異な機構(284ページ)と定義している。ただし国防委員会の会議には国防委員会委員のみならず、党組織指導部や党専門部署の部長、各省部長などが参加する形であり、国防委員会という存在そのものが権力機関であるというよりは、あくまで決定権がトップの金正日にあるという会議体であるという指摘は興味深い。そして先軍政治の中核は既に時代遅れの戦力となった人民軍ではなく、特殊部隊と核兵器であったとする。こうした先軍政治体制を支えたのは、内閣管理の公式経済である「第一経済」ではなく、軍・軍需経済の「第二経済」、党の経

済である「第三経済」であり、著者は「第二、第三経済」を「首領の経済」と定義している(286ページ)。「第一経済」は1990年代に崩壊して市場化が進展、一方で外貨等は金正日の登場以降「首領の経済」に吸収されていく構造となっていたという。このような状況から、社会主義市場の瓦解や自然災害により人民経済がストップしてしまっても、国家による経済全般に対する統一的政策が形成できず、最高指導者の裁量によって国家運営がなされるという混乱が起きているため、「首領の経済」にメスを入れなくては北朝鮮経済の再生はないと論じている。

「3 北朝鮮社会の変容——首領制の社会的基盤の溶解」では、1992年版では記述できなかった北朝鮮の社会にスポットを当てて考察したとしている。1995年以降、社会主義経済市場の消滅と食糧危機、飢饉の発生によって、配給制度を基として出身成分で階層化された人々が決められた単位の中で生活するそれまでの単位制社会が崩壊。これによって人々は「単位」から出て食糧探しのために離散し、移動の制限も事実上なし崩しとなる。こうした基層社会の流動化は、首領制を支えてきた社会的基盤が溶解していくことを意味しており、人々に首領の教示を学習させるというイデオロギーの再生産が不可能になったとする(291ページ)。そしてこのような状況の中で生まれてきた市場を国家が部分的に追認したのが2002年の「7.1措置」であるとして、市場の誕生は貧富の格差を招くと同時に、市場に出回る消費物資は中国に頼らざるを得なかったことから、市場化が北朝鮮の中国依存を強めたとする(292ページ)。配給制の崩壊によって首領と人民の間の恩恵と報答という関係は崩れ、また市場化をきっかけに人々が自律的に思考する個に目覚め、かつ外部からの情報流入は阻止できなくなっている。もはや首領制を支えるものは暴力装置のみであるという状況を指摘している。

「4 金正恩の登場と金正日の死——金日成への回帰」では、金日成から金正日への権力継承に当たっては、世襲という批判をかわすため金正日にはいかに能力があつて首領に対する忠誠心が厚く、仁愛の情にあふれているかといった後継者論を提

起して正統化する作業を進めたが、金正日から金正恩への後継正統化に当たってはむしろ「万景台の家門」という血の継承を前面に出したという点が異なるとする。金正日が20年近くかけて後継者としての足場固めを行ったのに対して、金正恩には準備の時間や権威もなく、そして権力行使した経験もなかった(302ページ)。そのため意図的に金日成への回帰というイメージ再生を試みるが、これは部分的にせよ金正日の否定でもあったとする(303ページ)。また、国家や党の制度と機能を復活させ、政策決定を制度化しようとしていることは、むしろ金正恩には金正日のような力や権威がないとみなされているためだとし、制度化された権威で金正恩の指導を守ろうとするものだとする(304ページ)。新しく改定された10大原則も金正恩の指導の確立がメインテーマとなっている。そして最後に張成沢粛清の背景について述べられている。著者の解釈によると、北朝鮮は中国人民銀行を通じてしかドル決済ができないため、中国は国連制裁を名目にして外貨資金を管理統制して、張成沢系の貿易会社に集中させたという。そして中国は核放棄と改革開放を、張成沢を通じて北朝鮮に要求する。こうした動きは北朝鮮にとり、いわゆる八月宗派事件(1956年)の際に中国の介入を招いたことを想起させ、結果として張成沢は粛清された。これは中国による改革・開放の要求を拒否し、また核放棄についても首領制の核心が核兵器であることを世界に向けて闡明するとともに、北朝鮮の主体を主張するものでもあった(315ページ)。

さて、本書1992年版で説明された首領制の確立について、今回の増補改訂版では金正日・金正恩時代にそれがどのように変質したのかを解き明かしている。北朝鮮では1990年代の疲弊により社会基層が弱体化し、首領制のシステムには綻び

が生じた。全人民への配給制は維持できなくなったが、首領に近い人々に対する贈り物などでその強力な独裁システムはかろうじて保たれている。これを支えているのは「首領の経済」である。北朝鮮経済の二重構造については本書以外でも色々と論じられており、軍需産業を管轄する第二経済委員会の存在自体は2010年に北朝鮮の公式報道からも明らかになった。経済の立て直しにはこの二重構造を改める必要があるが、皮肉なことに指導者としての権威が確立していない金正恩ゆえに「首領の経済」を国家に戻すことは容易でない。これは経済の改革と開放もままならないことを意味する。大胆な改革を実行するには強力なリーダーシップを必要とするが、権力の強力な源泉が首領制という統治システムに後ろ盾されている現体制にとって、首領制の基盤を自ら崩していくのは容易ではなかろう。国際的孤立を招いている核問題同様に、北朝鮮はどう進むにしても統治者にとっては茨の道である。本書が明らかにした首領制の形成過程とその爛熟期、変容を通時的に見ていくことで、今の北朝鮮の抱えるジレンマについてより理解が深まるのではないかと思う。

なお最後に些末な点ではあるが、「補章」部分の記述で気が付いた点について以下挙げておく。263ページ「中央軍事委員会第一委員長」は「中央軍事委員会委員長」、267ページ「万能の保険」と298ページ「白頭の革命伝統は新世紀進軍の保険である」の「保険」はそれぞれ「宝剣」、281ページ「咸鏡南道丹川市」は「咸鏡南道端川市」、301ページ「敏文中学」は「毓文中学」ではないか。また空白になっている356ページの金光鎮氏の論文の発表年は慶南大学校の中央図書館のサイトで検索すると2007年である。

(堀田幸裕 霞山会／愛知大学国際問題研究所)